

担当教官: 青山 亨(あおやま とおる). 東京外国語大学外国語学部インドネシア語
 研究室:633. オフィスアワー:月曜日2限. 電話:042-330-5300. メール:taoyama@tufs.ac.jp
 ウェブサイト:http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/aoyama/
 授業のお知らせ:http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/aoyama/
 学務情報システム:https://gakumu-web1.tufs.ac.jp/portal/



授業科目	アジア文化論Ⅱ 講義(6071)
授業題目	東南アジア古典文化論(2)
対象学年	3年生
開講学期	秋学期
曜日・時限	木曜・4限
教室	115
共通科目など	東南アジア地域文化論(3442)およびアジア地域研究Ⅱ(7208)と共通。市民聴講生受け入れ。
授業の目標	東南アジアの古典文化は、土着の精霊信仰・祖先崇拜の基層のうえに、ヒンドゥー・大乘仏教をもたらしたインド文明の影響を強く受けている。この講義では、インドネシアのジャワの例を中心に取り扱いつつも、東南アジアの古典文化を概観し、現代社会にも力強く生きているこの「古典的文化」の特徴を学ぶ。
教材・参考書等	適宜プリントを配付する。参考書は授業中に指示する。
成績評価の方法	平常点(30%)と期末レポート(70%)で評価する。
受講上の注意	「インドネシア文化論」演習を受講する者はこの講義を履修しておくことが望ましい。提出された課題・レポートなどで返却時に残ったものは評価終了後に破棄する。

1. 授業のねらい(上記の目標を参照)

2. 授業の内容・計画

主として以下の事項について概説する。東南アジア古典文化に関連したビデオ教材も適宜使用する。

■1学期の授業計画■

東南アジア古典文化の伝播の背景と条件を検討する。

1) 導入

- ・東南アジア古典文化とは何か
- ・東南アジアの歴史の仕組み

2) 基層文化としての精霊信仰

3) インド文化の東漸

- ・「長い助走期間」と「爆発的な東漸」
- ・初期王権の成立

4) 大乘仏教の伝播

- ・インドという土壌に育った宗教:バラモン教、仏教、ヒンドゥー教
- ・ボロブドゥール寺院

5) ヒンドゥー教の伝播

- ・プランバナナ寺院
- ・アンコールワット寺院

6) インド化を考える

■2学期の授業計画■

物語の形式と内容を通じて東南アジア古典文化を考える。

1) 導入:オリエンテーション

2) インド的世界観と歴史観

- ・メール山を中心とした世界
- ・4ユガから構成される宇宙の生成と終焉

3) 神々の時代:乳海攪拌など

- ・アンコールワット寺院

4) 英雄対魔物:ラーマヤナ

- ・プランバナナ寺院、ラーマキエン、スンドラタリ、映画版ラーマヤナ

5) バラタ族の決戦:マハーバーラタ

- ・映画版マハーバーラタ、ワヤン

6) ブッダの生涯とジャータカ

- ・ビルマ語写本、ボロブドゥール寺院、ジャータカ

参考図書1: 東南アジアについての概要を知るためのもの

1. 石井米雄ほか編. 1986. 『東南アジアを知る事典』平凡社. 東南アジアについて効率よく調べるために便利な事典. 同シリーズの『南アジアを知る事典』も有益.
2. 事典シリーズ. 同朋出版社. インドネシア, タイ, フィリピン, ベトナムの4か国の事典が出ている.
3. 京都大学東南アジア研究センター編. 1997. 『事典東南アジア—風土・生態・環境』弘文堂. 2ページ見開きで東南アジアに関する主要な事項を解説した読む事典.
4. もっと知りたい東南アジアシリーズ. 弘文堂. 東南アジアの各国編が出ている.
5. 暮らしがわかるアジア読本シリーズ. 河出書房新社. インドネシア, ヴェトナム, タイ, マレーシア, ビルマ, フィリピン各国編が出ている. 生活に密着したテーマで構成された各国案内.
6. 今井昭夫編集代表・東京外国語大学東南アジア課程編『東南アジアを知るための50章』明石書店. 地域基礎の授業から生まれた大学教養レベルの概説書. 同シリーズで東南アジアの各国編が出ている.
7. 歴史教育者協議会編. 1995. 『シリーズ知っておきたい東南アジア』1と2巻および『シリーズ知っておきたいフィリピンと太平洋』青木書店. 高校生を対象にした読みやすい概論.
8. 石井米雄・桜井由躬雄編. 1999. 『東南アジア史 I 大陸部』山川出版社. 最新の東南アジア大陸部の通史.
9. 池端雪浦編. 1999. 『東南アジア史 II 島嶼部』山川出版社. 最新の東南アジア島嶼部の通史.
10. 石澤良昭. 2009. 『東南アジア 多文明世界の発見』(興亡の世界史)中央公論社. アンコール朝を中心にたどる東南アジア史.
11. 東南アジア史学会ウェブサイト東南アジア関連リンク集も便利である.
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jssah/link.html>

参考図書2: 講義の主題全体に関わるもの

- 青山 亨. 1994. 「叙事詩, 年代記, 予言: 古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観」. 『東南アジア研究』32巻1号. pp.34-65.
- . 1998. 「インドネシアにおけるラーマ物語の受容と伝承」金子量重ほか編『ラーマヤナの宇宙』春秋社. pp.140-163.
- . 2007. 「インド化再考—東南アジアとインド文明との対話—」『総合文化研究』10: 122-143.
東外大学術成果コレクション⇒<http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/28733/1/tcr010008.pdf>
- . 2014. 「プランバナナ寺院シヴァ堂のラーマヤナ浮彫」吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編『画像史料論—世界史の読み方』東京外国語大学出版会. pp.56-88.
- 上村勝彦. 2003. 『インド神話—マハーバーラタの神々』(筑摩学芸文庫)筑摩書房.
- 田枝幹宏・伊東照司. 1992. 『ポロブドゥール遺跡めぐり』(とんぼの本)新潮社.
- Heine-Geldern, Robert. 1956. Conceptions of State and Kingship in Southeast Asia (Data Paper 18), Cornell University.
- ハイネ＝ゲルデルン, ロベルト. 1972. 「東南アジアにおける国家と王権の観念」(大林太良訳)大林太良編『神話・社会・世界観』角川書店.」
- 奈良康明・下田正弘・編. 2011. 『静と動の仏教』(新アジア仏教史第4巻 スリランカ・東南アジア)佼成出版社.
- 長谷川 明. 1987. 『インド神話入門』(とんぼの本)新潮社.
- 平山郁夫・石澤良昭・松本栄一. 1992. 『アンコール・ワットへの旅』(講談社カルチャーブックス)講談社.
- 安田治樹・大村次郷. 1996. 『図説 ブッダ』(ふくろうの本)河出書房新社.

構造化された東南アジア史 ver 4.1/2014-10-02

- ・ 時間・空間・社会による分節（メリハリ）を設ける。
- ・ 東南アジア史全体をブロックに分け、ブロックを以下の時空間セット I~VII でくくる。
- ・ セットとは別に 3つのサブセットを設ける。
- ・ 各セットの特徴と画期となるできごとを把握する。
- ・ なお、言うまでもないことだが、各ブロックやセットが同じ色で均等に染まったわけではなく、おのずとグラデーションがあり、さらに時間と共に変化したことを忘れないで欲しい。

- | | |
|-----|-----------------------------------|
| I | 基層文化が卓越した地域・時代 (A1~A4+B4+C4) |
| | 初期国家の出現 (A2+A3 の末期、B2+B3 に先行する時代) |
| II | 「中国化」した地域・時代 (B1+C1) |
| III | 「インド化」した時代・地域 (B2 大陸部、B3 島嶼部) |
| IV | 上座仏教化した地域・時代 (C2) |
| V | イスラーム化した地域・時代 (C3) |
| | 「交易の時代」(C1~C4 を貫通する時代) |
| VI | 列強により植民地化された地域・時代 (D1~D4) |
| | 日本軍政期 (D1~D4 の末期) |
| VII | 国民国家形成の地域・時代 (E1~E4) |

I 基層文化が卓越した地域・時代 (A1~A4+B4+C4)

地域： 東南アジア全域。

時代： 紀元後 5 世紀前後まで。東西海上貿易の発展に応じて、土着の初期王国が出現。

初期国家 (early state) という社会発展段階 (A2+A3 の末期、B2+B3 に先行する時代)

ただし、ベトナム北部は紀元前 2 世紀に中国に支配され、フィリピンは後代まで基層文化の時代が継続した。

特徴： 精霊信仰 (アニミズム)。首長制社会。水田稲作、焼畑。銅鼓。高床式家屋。アウトリガー・カヌー。

事件： モンスーンの発見による東西海上交易ルートが確立するに応じて、中継拠点としての港市などの初期国家が形成された。さらに、東南アジアの金や香料・象牙・玳瑁などの熱帯産物の需要も増加。自称「大秦王王安敦」(ローマ皇帝マルクス・アウレリウス)の使者の到来。

扶南：1 世紀末、クメール人の王国。メコン川デルタ地域。シャム湾に位置する外港オケオ。

林邑：2 世紀末、チャム人の王国。ベトナム中部。

その他、ビルマ南部にモン人の国家。マレー半島両岸にも港市。

補足： ベトナム北部は中国の支配に入り、「中国化」した。フィリピンではバランガイとよばれる首長社会がフィリピン南部のイスラーム化あるいはスペイン人到来まで継続した。

II 中国化した地域・時代 (B1+C1)

地域： ベトナム北部。

時代： B.C.111 年、漢の武帝は南越国を征討し、交趾、九真、日南を含む 9 郡を設置した。中国は、ここを經由して東南アジア (中国は「南海」と呼んでいた) の物産を得た。

特徴： 「中国化」：10 世紀まで中国により直接的に支配。11 世紀の独立後はベトナム人自身が中国型の国家モデルを追求。中国系大乘仏教、儒教、道教。律令制度。漢字の導入。ベトナムは中国をモデルとした「小中華」帝国の形成を目指した。

事件： 1009 年、李太祖が李朝を創設し、中国から独立。1174 年に中国から安南国王の称号を受ける。

13 世紀、チャン (陳) 王朝は、元の攻撃を 3 度にわたって撃退し、民族意識が昂揚する

が、14世紀になって国力衰退。

1407年から21年間、明朝の支配下に入るが、レ（黎）朝が独立を回復（1428年）。

補記：ベトナム中部・南部のチャム人（チャム人の王国連合の総称）は、「中国化」せずに「インド化」（さらにのちには「イスラーム化」）した。チャンパ（チャム人の王国連合の総称）は、15世紀にレ（黎）朝によって滅ぼされた。

III インド化した時代・地域（B2 大陸部、B3 島嶼部）

地域：ベトナム北部とフィリピンを除く東南アジアのほぼ全域（とくにインドシナ半島南部、大陸部の沿岸部、マレー半島を経てスマトラ島、ジャワ島にいたる地域）。

時代：5世紀以降。5～9世紀にインドからの影響があり、その後もインド的文化が自律的に発展した。

特徴：「インド化」：インドによる直接支配ではなく、現地権力によるインド文化の受容。インド系文字（南インド系ブラーフミー文字）、ヒンドゥー教、大乘仏教、部派仏教（「小乗」仏教）、サンスクリット（の語彙）、ヒンドゥー叙事詩（ラーマーヤナ、マハーバーラタ）、王権思想、世界観、歴史観、建築、美術、芸能など。この地域はその後「上座仏教化」したが、インド的影響は残存している。

B2 大陸部

事件：クメール人の王国（真臘）

ジャヤヴァルマン2世（8世紀）：アンコール朝創建。ヤショーダラヴァルマン4世

スーリヤヴァルマン1世（11世紀前半）、アンコールのバライ建造

スーリヤヴァルマン2世（在位1181～1218年）

ジャヤヴァルマン7世

モン人の王国：ドヴァーラパティ王国（墮羅鉢底）。チャオプラヤー川下流。

ピュー（驃）人の王国：エーヤーワディー川流域。

ビルマ人の王国：パガン朝（11世紀）。ピューの王国を吸収。

補足：ベトナム中部・南部ではチャム人が「インド化」した（チャンパー王国）。

B3 島嶼部

事件：シュリーヴィジャヤ（7世紀半ば～11世紀）：スマトラ島東岸（マラッカ海峡）。

シャイレンドラ：ジャワ島中部。大乘仏教を信奉し、ボロブドゥール寺院を建造

マタラム王朝：ジャワ島中部・東部（10世紀に移動）。ヒンドゥー教を信奉し、プランバナン寺院を建造。

クディリ王国：ジャワ島東部。1006年頃、内乱で一時分裂するが、再統一。

シンガサリ王国：ジャワ島東部。13世紀。

マジャパヒト王国：ジャワ島東部。シンガサリ王国の後継者。元軍を撃退して成立。東南アジア島嶼部の大部分を影響力をもった。宰相ガジャマダのもとラージャサナガラ王の時期（14世紀中葉）が最盛期。

IV 上座仏教化した地域・時代（C2）

地域：東南アジア大陸部（ベトナムを除く）ほぼ全域

時代：13世紀以降（現代まで）。ただし、ビルマでは11～13世紀にパガン朝が上座仏教を信奉していた。

特徴：パーリ語経典（文字は各言語によって異なる）。

事件：ビルマ以外の大陸部では「タイ系」諸民族があいついで勃興

スコータイ朝（13世紀後半～1438年）：第3代ラーマカムヘン王（在位1275～1299年）

チェンマイ王国（13世紀末）

アユタヤ朝（1351～1767年）：チャオプラヤー川下流域。アンコール朝を侵攻。破れた

王家は最終的にプノンペンに遷都（1434年）。上座仏教化する。
 ラーンサーン王国（1353年）：ラオ人（「タイ系」の王国）。メコン川流域。
 アバ朝（1364～1555年）：シャン人（「タイ系」の王国）。上ビルマ。
 ペグー朝（1287～1539年）：モン人の王国。下ビルマ。

V イスラーム化した地域・時代（C3）

地域： 東南アジア島嶼部（フィリピンを除く）ほぼ全域
 時代： 15世紀以降
 特徴： アラビア語、アラビア文字。イスラーム。シャリーヤ（イスラーム法）。
 事件： 14世紀末、マラッカ王国が勃興。明の保護下にマラッカ海峡の海上貿易センター。イスラームを受容し、東南アジアのイスラームのセンター。アユタヤと共に「交易の時代」の中心勢力。1511年、ポルトガルがマラッカを占領すると、マラッカの商人は各地に分散。
 ジャワ島のイスラーム化。16世紀、ドゥマック王国。17世紀、マタラム王国。
 補足： フィリピンも南部からイスラーム化（スールー王国）したが、スペインのキリスト教勢力によって南部に押し込められた。ベトナム中部・南部のチャム人もイスラーム化した。

C1~C4「交易の時代」

地域： 東南アジア全域
 時代： 15世紀～17世紀中頃
 特徴： 東南アジア全域と隣接するアジア諸海域に広がる交易活動が活発化した。日本の朱印船貿易、琉球王国の活動、ヨーロッパ人の到来と活動も「交易の時代」のできごとである。

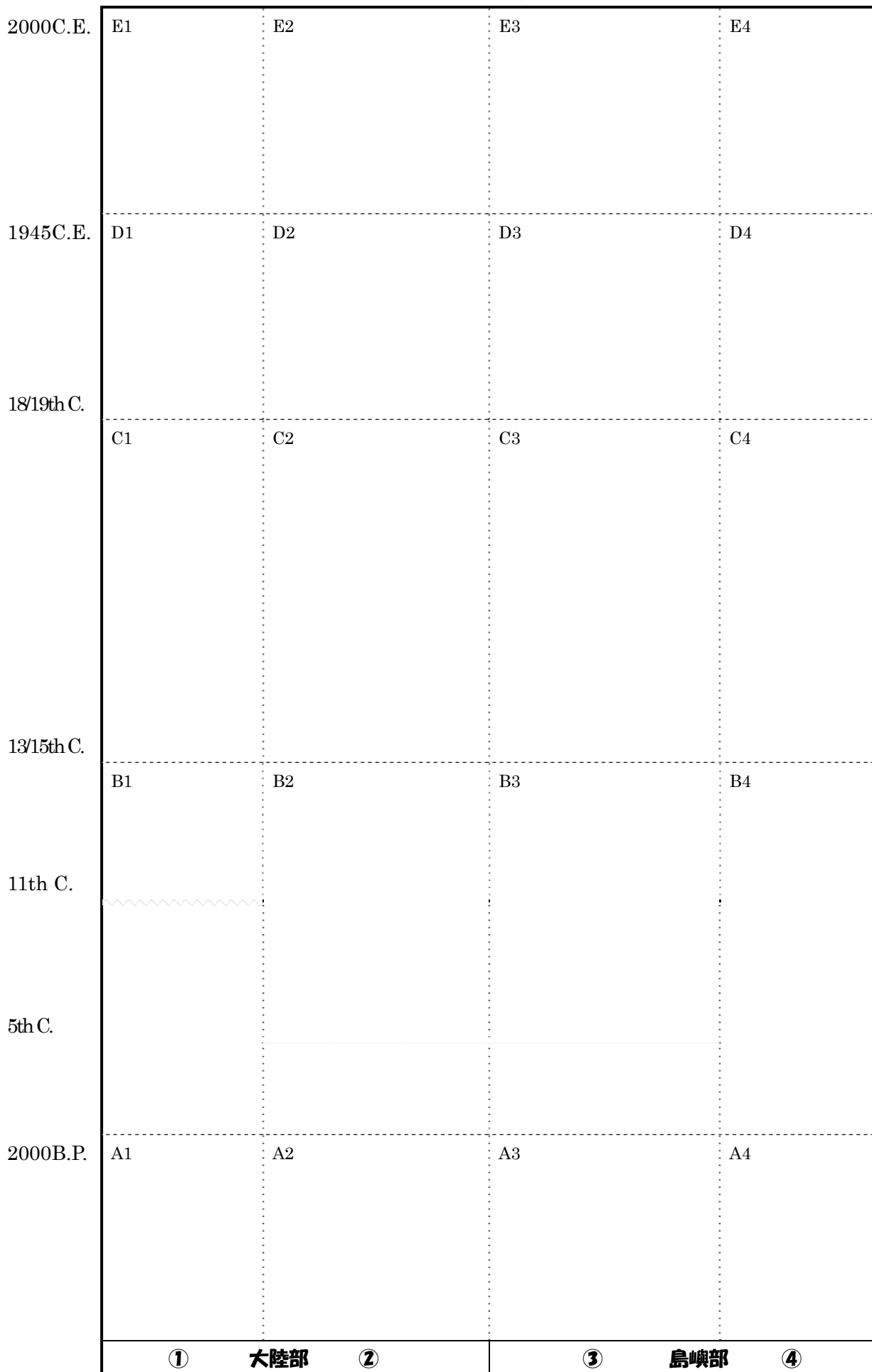
VI 列強により植民地化された地域・時代（D1~D4）

地域： タイを除く東南アジア全域
 時代： 18～20世紀。
 特徴： キリスト教（スペイン、ポルトガルはカトリック、オランダ、イギリス、フランスはプロテスタント）ただし、プロテスタント諸国は布教にはあまり熱心ではなかった。
 事件： ポルトガルのマラッカ占領（1511年）、スペインのマゼランのフィリピン上陸（1521年）が端緒。
 スペイン： フィリピン（のちにアメリカが支配）
 ポルトガル： 東ティモール
 オランダ： インドネシア
 イギリス： ビルマ、マレーシア、シンガポール、ブルネイ
 フランス： ラオス、ベトナム、カンボジア
 補足： タイは植民地化されず。日本軍政（1941～1945年）はセット VI の最終段階とみることができる。

VII 国民国家形成の地域・時代（E1~E4）

地域： 東南アジア全域
 時代： 第二次世界大戦終結（1945年）後（現代まで）
 特徴： 1967年、ASEAN（東南アジア諸国連合）の創設。当初は5か国。その後、地域協力機構として発達。
 補足： タイは第二次世界大戦以前から独立していた。

東南アジア史の超構造化



B.P.=Before Present, C.E.=Common Era